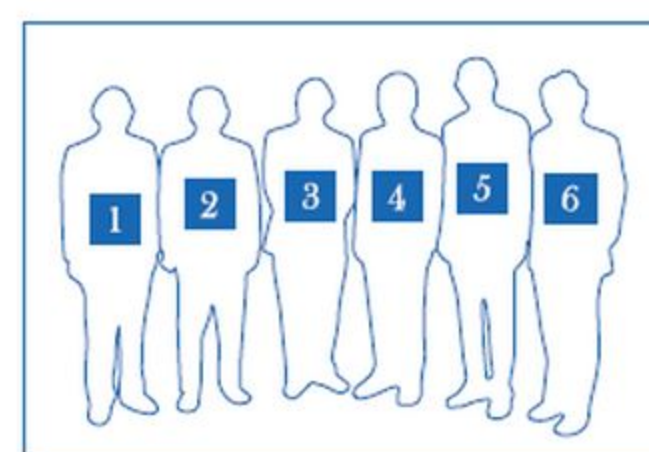




5

歴代学長座談会

山口大学の 「志」について 語り合う



- 1 三分一 政男 (第8代学長)
- 2 村上 恵 (第9代学長)
- 3 廣中 平祐 (第10代学長)
- 4 加藤 紘 (第11代学長)
- 5 丸本 卓哉 (第12代学長)
- 6 岡 正朗 (第13代学長)

司会
 山内 直樹 (副学長)
 前坂 祥子 (情報環境部)
 日高 友江 (情報環境部)

— 上田鳳陽先生が「山口講堂」を設立されて以来、その「志」は歴史の中で脈々と受け継がれて、今日の山口大学に至っています。その「志」について、本日は先生方に語り合っていただきたいと思います。

まず、就任中にどのような「志」をもって任務に当たられたか、また就任中のいちばんの思い出は何かについてお話しいただけますか。

工学研究科の改組が 一番の思い出

三分一 政男・第8代学長（平成2年～5年）

すでに20年以上を経過して、記憶も定かでないところもありますが、当時は「世界で活躍できる専門知識を有する数多くの人材を育成しよう」という国策のもとで、大学院博士課程、修士課程の新設・定員増などが図られていました。大学には、個々にその必要性を証明すること、他に類を見ない特長をアピールすること、卓越した研究教育のスタッフを有することなどが求められました。

山口大学では、「教育研究体制の高度化・学際化、開かれた大学としての地域社会への貢献、国際性豊かな大学」を掲げて、全学を挙げて組織改革を検討し、その実現に努力しました。

当時の概算要求には、学部、学科、講座の新設・改組再編が目白押しでした。調整は難航いたしましたが、各学部ならびに改組案検討委員会・将来構想委員会などのご努力



三分一 政男（第8代学長）

の甲斐あって、いくつかの構想が実現を見ました。特に、工学研究科の改組（博士課程の設置）は、すでに医学研究科には博士課程が設置されていましたが、工学部全学科および工業短期大学部の改組とともに一番の思い出です。

徹夜して 教養部の解散を決議

村上 恵・第9代学長（平成5年～8年）

いま三分一さんからお話があった大学改革の問題が、当然私のときにも非常に大きな課題になってきました。

当時、マーチン・トロウというアメリカの社会学者が、高等教育の発展段階を、「エリート段階」「マス段階」「ユニバーサル段階」という三つの段階に分けました。「エリート段階」は、18歳人口に占める大学在学者の割合が15%程度の段階をさすというものです。そこで言われていることが多くの人の関心を引いていたわけですが、大学としては、大学のありかたを厳しく縛っていた大学設置基準の問題、そしてそれを支えている大学教授の世代交代の問題を抱え、マーチン・トロウの言う「エリート段階」が崩壊しつつある中で、大学改革をどう進めていくのか、ということが最大の関心事であったわけです。

そこで山大の大学教育検討委員会で全学的な問題として大学改革をどう進めていくかの検討がスタートしましたが、最終的に、教養部の廃止にどう対処していくかということになりました。しかしなかなか結論が出ず、昼から始めた委員会が延々と夜まで続き、結局、夜をこして、翌日の朝やっとならびに教養部の解散が決議されたのであります。

それまで教育・学問中心であった大学が、次第に学生や教育の問題に重心を移していくという形をとるようになってきました。社会も大学に期待しているモデルは一元的ではなく、次の



村上 恵 (第9代学長)

ような四つの役割を考えるようになってまいりました。a；研究の役割、b；専門教育の役割、c；一般教育・教養教育の役割、d；社会に対する役割であります。これら四つの特化した役割を大学側が、どのような組み合わせで選択するかということになるのであります。

ここまできて私の学長としての時間終了ということになりました。

「時間学研究所」で 異分野共通の話題を

廣中 平祐・第10代学長(平成8年～14年)

私は、自分にできることは数学だけだと思っていましたので、大学がどういうものなのか、いわゆる管理職、特に学長という職がどういうものなのか、まったく考えたこともありませんでした。したがって、最初はどのようにいいのか分からないという感じでしたが、いろいろ勉強して、2年目ぐらいに、ようやく大学の組織が何かというのが少しずつ分かり始めてきました。

「山口大学」は一つの大学だと思っていたのですが、たとえば同窓会はそれぞれの学部同窓会があって、しかも同窓会のリーダーの方々は「山口大学」の卒業生ではないのです。工業専門学校とか経専とか県立医科大学、あるいは旧制山口高校の卒業生で、それぞれが別々に活動しておられる。私から見ると、一つのものではないような気がして、不思議な感じがしました。また、宇部地区と山口地区は相当な距離がありますが、一つの大学でそんなに

離れたキャンパスがあるところには、それまで勤めたことがありませんでした。それで、同窓会だけでも何とか一緒にものを作ろうと皆さん方と話し合いをして、ようやくそれを作ることができました。

もう一つは、共通の基金でも作ったらどうかと。基金そのものが大きなものでなくても、山口大学を卒業した学生にとって、自分たちも恩恵を被ったようなものが大学に一つある、ということはいいいのではないかと考えて、結構四苦八苦しましたが、最後には山口県出身の文部科学大臣のところに行って、ちょうど私の学長の任期が終わる頃に認可されました。ちっぽけなものでしたが、共通のものがあるということが、一つの象徴にはなったのではないかと思います。

それから、それぞれの学部は皆独立した感じで、学部の違う先生方同士はあまり話をしないのではないかと。だから、先生方がお互いに話せるような方法はないかと考えて、「時間学研究所」というのを作りました。「時間」といえば、医学、数学、物理、工学、経済など分野が違って、共通の話題があるのではないかと考えて、文科省から予算も出なかったわけですが、各学部の皆さんが賛成してくださって、「時間学研究所」というのができました。その結果、各学部の先生方がお互いに話をされるようになって、私としてはたいへん良かったと思っています。

独立行政法人の話は、私のときはまだ議論ばかりでした。準備が十分できなくて心配していましたが、加藤先生は相当ご苦労なさったのではないかと思います。



廣中 平祐 (第10代学長)

法人化の危機で 大学がまとまった

加藤 紘・第11代学長(平成14年～18年)

苦勞がなかったとは言いませんが、ルールはできていましたから非常にやりやすかったです。私の4年間でいちばん大きな出来事は、いま廣中先生がおっしゃった、大学法人に変わったということです。

学長になって、当時の遠山文部科学大臣が、大学に民営的経営手法を取り入れる、日本版シリコンバレーを10か所つくる、特許を10倍にする、と言われた。全部実学です。そして、6年間の中期計画を出せ、それによって評価する、運営交付金を決める、とおっしゃったわけです。



加藤 紘(第11代学長)

企業の経営的手法を取り入れるというけれども、大学の人を育てる教育とか、研究というのは、そんなものではなかろうという議論は当然ありました。私もそう思いましたが、もう法律で決まってしまったのです。それで評価される、予算まで決められるとなると、やはりまずは生き残る、その中でいかに現況を持って行くか、というのが課題だと思いました。

2年後に法人化になるということが分かったので、すぐに委員会を作って中期目標を作ってもらいました。次の丸本先生のときに大学憲章ができましたけれども、まだそれもなかったわけです。「発見し・はぐくみ・かたちにする」というのだけあって、何を発見するかもないわけです。それで一生懸命勉強して、幸い私は大学のことが非常によく分かりまして、附属小学校のこと

まで分かりました。

そして平成16年4月1日に法人化になりました。危急存亡の秋なので、大学の人たちが皆さん一致して動いてくれました。法人化、危機、ということでもまとまったのだと思います。非常に有り難いことに、スムーズに乗り切らせていただいたと思います。

大学改革の第一歩 — 鹿児島大学との共同獣医学部

丸本 卓哉・第12代学長(平成18年～26年)

私は廣中先生と加藤先生の下で、副学長をほぼ6年させていただきました。そのときに、今までは農学部だけだったのに、全学的な視点から見なければいけないという経験をしました。ちょうど法人化の過渡期の混乱をずっと見ていて、山口大学はどこを改善していったらいいか、私なりにいくつか考えはありました。

その一つは、大学改革をどう進めていったらいいのかというときに、各部署の考え方がたいへん違う、特に文系と理系で違う。その違いを何とか一つにまとめていかなければ、法人化後、うまく行かないと思っていました。それで、大学全体で、山口大学が今後目指す方向はこういうものだ、というものを作る必要があると思いました。



丸本 卓哉(第12代学長)

理念はできていました。ですから10年～15年ぐらいの中期ビジョンとして、「明日の山口大学ビジョン」というのを作り、「教育」「研究」「社

会貢献」の三つをその中核としました。ただし、文書を作っただけでは動きません。そこでタイムスケジュールとロードマップを考え、10年スパンの「山口大学の改革ビジョン」を作りました。

そして学部の改革、共通教育の改革、大学院の改革などのグルーピングを作って進めようしました。どれも難しい問題なので、その中でまず手を着けられるところからということで、当時いちばん問題になっていた獣医学の国際化という問題に取り組みました。鳥取、山口、宮崎、鹿児島の四つの獣医学科が連携していたので、私が4大学に話をして協議を進め、最終的に鹿児島大学との共同獣医学部ができました。これが大学改革の第一歩になりました。このとき20億近いお金が付き、教員も8名プラスされました。この過渡期に大学改革の先陣を切ってお金がポーンと付いた。これでみんなが大学改革をしなければいけないという気運になったと思います。

それから私の最後の仕事になったのが、部局長の選考方法の改革です。最初はすべての部局から猛反対を受けましたが、法人化後、大学が変わるためには部局の意識も変わってほしいと説得を重ねて、最終的には昨年末に全部局から賛成を得ることができました。これは実際には岡先生の代から実行されるわけですが、全国でこれをやった総合大学は山口大学が初めてだったのです。

平成27年に 国際総合科学部がスタート

岡 正朗・第13代学長(平成26年～)

山口大学は先生方のおかげで、ずいぶん改革の気運が感じられます。もともと長州ですから、この土地の中に維新のDNAが何らかの形で刷り込まれていると思っています。いろんな改革の時期にあって、その先頭に立たなければいけない、というのが今の私の決意です。丸本先生のご厚意で、さまざまな会議に一緒

に出させていただいて、バトンタッチをしたときには、自分ではかなり加速をつけたつもりでいました。そういうことで、現在の執行部の先生方もスムーズに大学運営に移れたのではないかと思います。私としては幸せな滑り出したと思っています。



岡 正朗(第13代学長)

平成28年から第3期中期目標に移りますので、この2年間に改革が見える形にするということを文科省からも言われているわけですが、幸い山口大学は平成27年に国際総合科学部という新しい学部をスタートできそうです。これは文理融合型の学部で、山口大学では9学部目になります。大学というのはやはり学問をするところであって、専門の学問領域があるというのが大前提だと思います。ところがこの新学部は、私から見るとむしろ実学的なのかなと思っています。こういう学部が国立大学の中にできるのは、あまりないケースではないかと思っています。コミュニケーション能力と課題解決能力の二つは、いま社会で非常に強く求められている能力です。この二つを鍛えよう、そして国際化に備えようというものです。こうした人材を育成するというのは、ある意味、吉田松陰先生の実学に似ているのではないかと私は思っています。

これを皮切りに、教育学部の改組、経済学部の改組、そして人文学部の改組を行いたいと思いますが、文部科学省からは、人文学部の改組が行われるというのは画期的だと言われています。その次は理系の大学院の改組、そして理系の学部の改組に着手しなければい

けないと思っています。

知事を初めとする地域の首長さんも、山口大学にたいへん注目してくださっていて、私は、山口大学が山口県のシンクタンクになる、「山口県にある大学」から「山口県の大学」になる、と言っています。

先輩の学長先生方の意志を私も受け継いで、山口大学をさらに発展させるために、微力ではありますが全力を尽くしたいと思っています。

— 本日は卒業生も出席しております。本学の卒業生であり、また職員でもある立場から、どのような「志」をもってこれから歩いていくか、ということについて前坂さんと日高さんをお願いします。



山内 直樹（副学長）

山口大学の価値を高めていくには

前坂 祥子・人文学部卒

私は、職員になって初めて、大学というのは、一つの目標や行く先があって、たくさんの人によって支えられて運営されている組織なんだと知りました。

いま図書館で働いていますが、私が職員になってからたびたび耳にしたのは、大学は生き残るためにこれから大変なんですよ、職員としてちゃんと考えて働きなさいよ、ということでした。



前坂 祥子（情報環境部）

大学が生き残っていくためには、やはり山口大学の価値を高めていくことが重要なのだと思います。そのためには私たち卒業生が、社会に出てからどう活躍していくかということが大事だろうと、そういった思いで日々仕事をしています。そこで私にできることは何かと考えたとき、先生方の研究のサポートとか、学生の学習のサポートを全力でやっていくことが、微力だとは思いますが、私のできる仕事だと思っています。

歴史の上に立っているという認識をもって

日高 友江・人文科学研究科修了

私もいま図書館で働いていて、レファレンスというのをやっています。大学の中からも外からも日々、こういう資料はありませんかと、このことについて調べてください、といった問い合わせが来ます。最近多いのが、廣中先生のお話にもありましたが、前身の山口高商とか旧山口高校の同窓会の方からの、昔の資料を探しているのですが、それが図書館にありますか、



日高 友江（情報環境部）

というお問い合わせです。そういう方とやり取りをしていると、たいへんな熱意を感じます。そういう方の思いが脈々と山口大学に繋がっているんだなと感じています。図書館としては資料を保存することも一つの仕事ですが、自分もそういった歴史の上に立っているんだという認識の上に、大学を支えていく一員であるという意識をしっかりと持って働いていきたいと思っています。

— 最後に、これからの山口大学はどうあるべきか、その「志」について、一言ずつお話をいただければと思います。

イノベーション発生の場として

三分一 政男・第8代学長

維新発祥の地であり、大業を果たした先人たちの進取の気性を受け継いで、単なる技術革新ではなく、総合大学の利点を活かした、新しい資源への挑戦、新しい組織の構築などをも含んだ広い意味での「イノベーション発生の場」として学問文化の推進役を担うことを期待しています。

変革の流れに即応して

村上 恵・第9代学長

歴代学長先生の話をお聞きしていると、それぞれの方々の時代に少しずつシフトしながら大学がどんどん変革してきていることがわかります。ですから、そういうことを早く自覚して、それに乗っかって、それに対応できる動きをしていくことが、「志」を受け止めて、次の次代に伝えていくことに繋がるのではないかと思います。

専門分野を深く研究することを忘れるな

廣中 平祐・第10代学長

私が海外で経験したことから言うと、それぞれの専門分野の人たちが非常に深く研究をしていて、その上で違う分野の人同士が話をしている。違っていても話をするということが大切なことなのです。しかし、専門分野を深く研究することを忘れてしまったら、全体の水準が落ちるばかりではないかと心配するのです。ですから、自分の専門分野で世界的な水準になろうと思って、一生懸命頑張って、他の分野のことなど耳も傾けないという時期があってもいいんだ、そういう青春もあっていいんだと、その上でコミュニケーションとかいろんなことを言うべきだと思います。それによって大学の特徴が出てくるのだと私は思っています。

山口県人の気風の上にあぐらをかいてはいけない

加藤 紘・第11代学長

山口県といえば吉田松陰先生が大内文化だと言われます。そのDNAは残っているのかもしれないけれど、それは昔のことです。明治維新を見ても分かるように、山口県人には進取の気風がある、改革の気風があるといいますが、それにあぐらをかいてはいけないのではないかと。たしかに山口県人は独特な気風を持っています。自分に対してプライドがある、何かやれるのではないかとという気持ちが強い。そういうところは活かす、ただし、いい方向に活かす。どういうふうに活かすかを客観的に冷静に判断する。そういうことも含めて、山口大学がどういう方向に特徴を作っていくかというのが大事なことで、そのあたりは岡先生に期待したいと思います。



たくましく、チャレンジ精神に 富む人材を共に育てる

丸本 卓哉・第12代学長

長州、山口の文化や歴史を活かす、そして、たくましく、チャレンジ精神に富む人材を共に育てる、という「志」を、山口大学の教職員・学生が一体となって、伝えていってほしいと私は思います。それしか他大学に勝つ道はないと思っています。

私の背中を1万人の学生が 後押ししてくれている

岡 正朗・第13代学長

山口大学は創基200周年ということで、その歴史にはたいへん重いものがあると思います。ただ、山口大学の学生や教職員がそのことを

よく知っていたかという、そうではなかったのです。ですから、このたびの創基200周年記念事業は、山口大学の歴史を振り返りたいへんいいチャンスになったと思います。

私は、大学の生き残りなんて考えていません。生き残ることは当たり前で、発展することしか考えていません。むしろそのために何をするか、ということを我々は考えるべきだと思っています。私の背中を1万人の学生が後押ししてくれているのだという気概のもとに、力いっぱい進んでいきたいと思っていますので、学長先生の方々には、大所高所からご支援いただけますことを心からお願い申し上げます。ありがとうございました。